

あとがき

今回はイヴ・タンギー YVES TANGUY (1900-55)の版画のほぼ全貌を示す展覧会である。1932年から53年に至る間の版画30点、エスタンプ1点およびドローイング2点を展示すると同時に、これら版画、エスタンプが収録されていた詩画集等関係資料も併せご覧いただくこととした。版画作品の制作年代別、手法別一覧表は別表のとおりである。

カタログについてであるが、冒頭にタンギーに関する詩4編を載せた。すなわち、瀧口修造(2編)、A・ブルトン、P・エリュアールの3詩人の詩である。瀧口先生の“イヴ・タンギー”は「瀧口修造の詩的実験1927～37」(思潮社)に収録されている作品である。“Pour Tanguy”はYVESの文字を頭に韻を踏んで作られた詩で、この詩は当画廊の第一回目の展覧会“M. エルンストン、Y・タンギー版画2人展”(1978年9月11日-30日)——この時にはタンギーの版画が8点展示された——のお祝いに瀧口先生からいただいたもので、私にとってはまことに記念すべき詩である。ブルトンおよびエリュアールの詩は巖谷国士さんに訳していただいたが、その出

所は脚注をご覧いただきたい。

次にテキストであるが、これはタンギーに詳しい巖谷國士さんにご寄稿いただいた。4編の詩と巖谷さんのエッセーとが相俊ち、このカタログは大層ふくらみのあるものとなったのはうれしい。

作品のデータについてはW・ワイトロックの編集したカタログ(YVES TANGUY, DAS DRUCKGRAPHISCHE WERK, 1976; Wolfgang Wittrock)にほぼ全面的に依存したが、版画が収録されている詩画集の実物が入手できたものについては、それを参照して作成した。

なお、この展覧会を記念しポストカード1組(4点)を作成したことを申し添える。

このタンギーの版画を眺めながら、私の感ずるところを2,3述べておきたい。タンギーはエルンスト、ミロとならびシュルレアリストの画家としてもっとも秀れた作家の一人であることは周知のところである。因みにトリストラン・ツアラが1949年に出版した“L'ANTITETE-MINUIITS POUR GEANTS”3巻はこの3人の作家が版画を作成している(カタログNo.I-17参照)ことから伺える。

タンギーの版画をみてまず最初に感ずるのは骨体記号的な彼独得のスタイルである。これが私を妙な気持に誘い込む。不思議な世界に私を連れ込むのだ。そして一種の歯切れのよさを感じるのはその線描の見事な切れ味によるものだと思う。切れ味はわが骨までしみ透るのである。

希有のシュルレアリストと言わねばならない。

タンギーはエルンストやミロと異り、わずか55才で亡くなった。そのため作品の数は少い。彼の生涯の友人、ピエール・マチス(アンリ・マチスの息子で画商)が出版した彼のタブローのカタロググレゾネ(1963)によると作品最終ナンバーがNo.458であることから推定される。版画は30数点であろう。30年ばかりキッチリ仕事をして亡くなったという感じを私は持つが、彼の作品は小品といえども質が高く、ムラがないのは見事だ。

版画作品についてみるとエディションは10部乃至20部(カタログNo.I-1,2,3,4,5,10,19-A)と極めて少いものが多い。サイズも最大のもので“棒占い”(カタログNo.I-13)の29.8×22.4cmであり概して小さい。これは彼の作品が詩画集や本の扉絵として作成されたものが多いことと関連する。版画作品30点のうち26点がそれに該当する。また、殆んどがエッチングでその大部分がS.W.ヘイターのパリまたはニューヨークのアトリエで作成されたものである。(カタログNo.I-1,15,16を除くすべてで26点)。タンギーのサインは極めて小さくそしてキッチリとしたブロック体である。また、版上にY・Tとそれこそ虫眼鏡でみないと分らないような小さな刷込みサインが隠されている作品がある。(カタログNo.I-3,8,10,14,15-A)。それを見付けると思わず微笑を禁じ得ないのであるが、どうもタンギーはそれを予め意図していたのではないかと思いたくなる。ユーモアに満ちたタンギーを感ずる。

これら版画作品30点と関係資料の一群はタンギーの仕事を知る上で貴重である。その意味では一枚のタブローよりも意味があると私は思っている。タブローで展覧会が出来ればそれこそ素晴らしいことであるが、その実現は私にとっては夢の夢のそのまた夢である。これはミュージアムレベルの話である。1982年に開かれたポンピドー・センター(パリ)の大回顧展をみるチャンスを失しカタログで偲ぶだけであるが、美術館でもタンギー展は大変な仕事であろう。当画廊のレベルでは、この版画展がまず精一杯のところである。しかし、まあよくこの一群にぶち当たったものだとつくづく思う。私としてはどうしても一度やって置きたい展覧会のひとつであるだけに、これが実現できたうれしさは格別である。恐らくわが国では初めての展覧会であろう。タンギーの、シュルレアリスムの、そして現代美術の愛好家の皆様にはぜひともご覧いただきたいと思う。亡くなった瀧口修造先生にこの展覧会を見ていただきたいかった。先生は興奮されるだろうかと想像すると楽しい。

最後に、この展覧会にご協力いただいたベルリンのD・ブルスベルク氏、エッセーをお寄せいただいた巖谷国士さん、そして名は記さないが、この展覧会の開催、カタログ作成に参加していただいた方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

1985年11月6日

佐谷画廊 佐谷和彦